

カフェオレやエスプレッソ、カプチーノなど、今ではさまざまな種類があり、食生活に欠かせなくなったコーヒー。その日本への伝来については諸説がありますが、江戸時代の初めごろにオランダ人が出島に持ち込み、出島に出入りする通詞(通訳)や役人もコーヒーを飲んでいたことが「和蘭商館日記」などに記されています。

さて、このコーヒーに興味を持ったのが津山藩の洋学者・宇田川榕菴です。榕菴はわずか18歳で「哥非乙説」という論文を書いています。当時まだ一般の人が口にするほどのほとんどなかったコーヒーを、榕菴はいつ飲んだのでしょうか。

「哥非乙説」をまとめる2年前、榕菴は養父の玄真とともに、將軍に拜謁するために江戸へやって来たオランダ商館長と面談をしています。こうした江戸参府の時にお土産としてコーヒーを贈ることがあったようで、この時榕菴もコーヒーを口にするチャンスに恵まれたと考えられます。きっと独特の色と香りに驚きながら飲んだに違いありません。

後に玄真と榕菴は、幕府の仕事でフランス人シヨメールが書いた『家庭百科事典』(オランダ語版)の翻訳に携わるようになります。その訳本『厚生新編』の中のコーヒーの項目を担当した玄真は、榕菴の考えとして「えごの木と、図で見るコーヒーの木は形状がよく似ていて、味は淡白、微甘、油気が多く西洋の船がもたらすコーヒー豆と異ならない」と書き加えています。実験を大切に作る榕菴らしく、他の植物と比べたり、またそれを実際に食べてみたりと、詳しく調べていたことが分

# 筆漫覧博洋

## ～ 榕菴のコーヒー研究 ～

かるのです。

榕菴とコーヒーとのつながりはそれだけではありません。「珈琲」の当て字は、榕菴が考えたものといわれているのです。昭和初期に研究家が多めたコーヒーの異名・熟字の一覧には「珈琲」について「宇田川榕菴自筆蘭和対訳辞書ヨリ。現代の【珈琲】の字は榕菴の作字なりし」とあります。作字とは、文字を新しく作ることです。しかし、「珈」も「琲」も旧来からある漢字なので、正確には字を当てた、ということなのでしょう。

コーヒーは幕末に正式に輸入されるようになり、明治以降次第に人々の暮らしの中に広まっていきます。道端の自動販売機で手軽にコーヒーを買える今日の様子は、さすがに榕菴も想像できなかったことでしょう。



※透かしの家紋は右が箕作家、左が宇田川家のもの

▲榕菴の描いたコーヒーカン(コーヒーの煮出し器)の図(武田科学振興財団杏雨書屋所蔵)と新津山洋学資料館展示用に作製された復元品

つやま 広報

10 月号

平成21年  
2009  
660号

TSUYAMA CITY  
Public Relations Magazine

編集・発行 (毎月10日発行)  
津山市総合企画部市長公室(市役所3階)  
〒708-8501 岡山県津山市山北520番地  
☎0868-23-2111(代) ☎0868-32-2152  
Eメール kouhou@city.tsuyama.okayama.jp

☆広報つやまはホームページで閲覧できます。  
<http://www.city.tsuyama.okayama.jp/>



今回の特集は、ホームページ「津山だんじり保存会館」の作成者・延原誠さんにご助言をいただきながら編集しました。各町内の誇りであるだんじりすべてを紹介することができなくてごめんなさい。ぜひ、熱い祭りを実際に体感してください。(和)

画家の保田扶佐子さんが自宅に美術館をオープン。写真家の杉浦慶太さんは11月8日(日)まで倉敷市立美術館に作品を出展し、12月には天神山文化プラザ(岡山市)で展覧会を開催。取材で知り合った人たちが活躍するのはうれしいですね。(S)

つ・ぶ・や・き

編集室

来年3月開館する「新津山洋学資料館」。前庭で迎える洋学者たちの銅像、洋風な建物外観、図書室や五角形の吹き抜けのホールなどの内部、中庭など。今月末から開催される内見会で、一足先に見てみませんか。(S)

### 8月中のひとの動き

人口	108,869人(前月比△71)
男	51,928人(同△9)
女	56,941人(同△62)
世帯	43,836世帯(同+3)
転入	223人
転出	276人
出生	67人
死亡	85人

(9月1日現在)

広報つやまは、環境保護のため再生紙と大豆油インキを使用しています。読み終えた後はリサイクル(雑誌)にご協力ください

